

高 等 学 校

令和 6 年度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	3
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	4
V	研究構想図	5
VI	研究の内容	6
VII	研究の成果	13
VIII	今後の課題	16

研究主題

生徒が自分の考えを形成し深めるための 「読むこと」の指導と言語活動の充実

I 研究主題設定の理由

1 学習指導要領改訂と「令和の日本型教育」

「高等学校学習指導要領」においては、全教科・科目等において、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で育成を目指す資質・能力を整理して示すとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善を求めている。

「高等学校学習指導要領」において、国語科で育成を目指す資質・能力は「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」と規定され、それらの資質・能力を育成するためには、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせることが必要であると示されている。また、自分の考えを形成する学習過程が重視され、「思考力、判断力、表現力等」の全ての領域において、「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられている。

さらに、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中央教育審議会答申 令和3年1月26日）（以下、「答申」という。）では、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」とし、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を求めている。

「答申」においては、「個別最適な学び」を実現させるため、「個に応じた指導」を一層重視し、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められている。その際、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要であるとされている。

2 高校部会の共通のテーマ

「高等学校学習指導要領」では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善による資質・能力の育成が示され、「答申」では、個別最適な学びと協働的な学び、それぞれの学びを一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが示されている。このことから、高校部会の共通テーマを「全ての生徒の資質・能力を育成する、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業改善～各教科の見方・考え方を働かせた探究的な学習の実現～」とし、研究を進めた。

3 生徒の現状と国語科の指導上の課題

研究主題を定めるに当たり、研究員の所属校の生徒の現状と課題を基に協議を行った。部員は所属校において、高等学校学習指導要領や答申の趣旨を踏まえた授業改善に取り組んでいるが、協議を通じて、次のような生徒の現状が提示された。

【生徒の現状】

- ・ 生徒一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じた指導が十分ではなく、生徒が自分の学習を調整することに課題がある。
- ・ 「読むこと」において、文章の構造と内容の把握にとどまり、言葉を通して自分の考えを形成することが十分にできていない。
- ・ 考えを共有する際に、お互いの考えを伝え合うことにとどまり、他者の考えを踏まえて自分の考えを更に深める活動が十分にできてない。

また、中学校からの接続を考えるため、「令和5年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校国語）」を確認した。そこでは、「思考力、判断力、表現力等」における各領域の「指導改善のポイント」として、以下の3点を挙げている。

- ・ 話の内容を捉え、知りたい情報に合わせて効果的に質問する指導の充実
- ・ 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く指導の充実
- ・ 文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする指導の充実

以上を踏まえ、国語科の指導上の課題を次のように整理した。

【国語科の指導上の課題】

- ・ 生徒が自分の学習状況を把握した上で、目標を設定し、目標達成までの筋道を立てられるような指導を行う必要がある。
- ・ 文章の構造と内容の把握のみではなく、言葉を通して自分の考えを形成するための指導を充実させる必要がある。
- ・ 他者と考えを伝え合うことから、言葉を通して互いの学びを深める言語活動を充実させる必要がある。

4 主題設定の理由

上述の生徒の現状と国語科の指導上の課題を踏まえながら、平成30年の高等学校学習指導要領改訂の際に高等学校の課題として示された「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型」に偏っている授業から、高等学校学習指導要領解説国語編における「自分の考えを形成する学習過程を重視」した指導の実現を目指していくことが必要だと考えた。そこで、「読むこと」の領域で「考えの形成」について指導していく必要性を考え、研究主題を「生徒が自分の考えを形成し深めるための『読むこと』の指導と言語活動の充実」とし、研究を進めた。

Ⅱ 研究の視点

1 研究の着眼点

本研究では、高等学校学習指導要領の趣旨や答申、生徒の現状等を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、言葉で自分の思いや考えを深め、他者との関わりの中で新たな視点を取り入れ、生徒が自分の考えを形成することができる指導の実現を目指し、「読むこと」の領域における指導の工夫と言語活動の充実を図ることとした。

2 「読むこと」の指導の工夫

「読むこと」の領域の中で、特に「考えの形成、共有」の学習過程に焦点を当てた指導を行うことにより、生徒の現状の『読むこと』において、文章の構造と内容の把握にとどまり、言葉を通して自分の考えを形成することが十分にできていない」ことに向き合う指導となると考えた。そのため、生徒自身の思考を促す問いや、単元の構成の工夫を行う。また、評価の基準を生徒と共有することで学習の目標を明確化し、生徒が自分の学習状況を把握した上で、自ら目標を設定し、目標達成までの筋道を立てられるようにするとともに、学習を通じて変容する思考の過程を可視化できるよう教材を工夫する。

3 言語活動の充実

文章から読み取ったことと自分の既存の知識や様々な経験を結び付けて考えを広げたり深めたりする力の育成を図るため、自分と他者の考えを相対化して、新たな視点から自分の考えを見直し、筆者の主張や文章の内容に対する理解を深め、自分の考えを言葉で十分に形成できるような言語活動の工夫に取り組むこととした。

Ⅲ 研究の仮説

「Ⅱ 研究の視点」を踏まえ、本研究における仮説を次のように設定した。

- ・ 単元で育成することを目指す資質・能力と、資質・能力を身に付けるための筋道を可視化することで、生徒が自分の学習を調整し、よりよく資質・能力を身に付けることができる。
- ・ 教師が生徒に対して思考を促す問いを設定し、多様な論点や異なる価値観と結び付ける言語活動を行うことで、生徒が自分の考えを形成することができる。

IV 研究の方法

1 具体的方策

本研究の仮説を検証するために、以下のような学習活動を設定し、生徒の変容を分析する。

- ・ 評価の基準を事前に示し、生徒が自分の学習状況を把握し、目標を設定、達成するための自己評価を実施する。
- ・ 筆者の主張や文章の内容に対する、自分の経験や実生活に基づいた問いや様々な視点から物事を考える問いの設定を行う。文章の内容と自分の知識や経験を結び付けさせることで、自分の考えを形成させる。
- ・ 自分と他者の考えの共通点や相違点に気付かせ、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠を見直し、深めさせる。

2 検証方法

以下の方法で生徒の変容を分析し、本研究の仮説を検証する。

- ・ 評価の基準を活用した自己評価により、自分の課題と解決に向けた筋道を可視化させる。
- ・ 自分の考えを形成し、他者と考えを伝え合うことにより自分の考えを深めるための手順を示した「ワークシート」を作成し、生徒の自己評価と同じ基準で評価するとともに記述内容を基に生徒の特性や学習状況等を分析する。
- ・ 検証授業の事前・事後で自分の考えの変容について、一人1台端末を用いてアンケートを実施する。

3 「考えの形成」に関する評価の基準

「考えの形成」における評価の基準は次のものを学習者に分かりやすい表現に変え、提示した。

評価	A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力を要する）
考えの形成	自分と他者の考えの共通点や相違点に気付き、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠や論拠を見直し、深める（再構築する）ことができ、自分の考えの変容の根拠・理由が示されている。	自分と他者の考えの共通点や相違点に気付き、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠や論拠を見直し、深める（再構築する）できている。	自分と他者の考えの共通点や相違点に気付き、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠や論拠を見直していない。

V 研究構想図

全体テーマ「全ての生徒たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」

高校部会テーマ

全ての生徒の資質・能力を育成する、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業改善
～各教科の見方・考え方を働かせた探究的な学習の実現～

国語科における「資質・能力」について

【知識及び技能】生涯にわたる社会生活において自己と他者の相互理解を深めるために言葉の特徴や役割を理解し適切に表現する力

【思考力、判断力、表現力等】生涯にわたる社会生活において他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考し想像する力

【学びに向かう力、人間性等】言葉がもつ価値への認識を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度

高校部会テーマにおける現状と課題

【現状】

- ① 生徒一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じた指導が十分でなく、生徒が自分の学習を調整することに課題がある。
- ② 「読むこと」において、文章の構造と内容の把握にとどまり、言葉を通して自分の考えを形成することが十分にできていない。
- ③ 考えを共有する際に、お互いの考えを伝え合うことにとどまり、他者の考えを踏まえて自分の考えを更に深める活動が十分にできていない。

【課題】

- ① 生徒が自分の学習状況を把握した上で、目標を設定し、目標達成までの筋道を立てられるような指導を行う必要がある。
- ② 文章の構造と内容の把握のみではなく、言葉を通して自分の考えを形成するための学習活動を充実させる必要がある。
- ③ 他者と考えを伝え合うことから、言葉を通して互いの学びを深めるための学習活動を充実させる必要がある。

高等学校国語部会研究主題

生徒が自分の考えを形成し深めるための「読むこと」の指導と言語活動の充実

仮 説

- ・ 単元で育成することを目指す資質・能力と、資質・能力を身に付けるための筋道を可視化することで、生徒が自分の学習を調整し、よりよく資質・能力を身に付けることができる。
- ・ 教師が生徒に対して思考を促す問いを設定し、多様な論点や異なる価値観と結び付ける言語活動を行うことで、生徒が自分の考えを形成することができる。

研究方法

〔具体的方策〕

- ・ 評価の基準を事前に示し、生徒が自分の学習状況を把握し、目標を設定、達成するための自己評価を実施する。
- ・ 筆者の主張や文章の内容に対する、自分の経験や実生活に基づいた問いや様々な視点から物事を考える問いの設定を行う。文章の内容と自分の知識や経験を結び付けさせることで、自分の考えを形成させる。
- ・ 自分と他者の考えの共通点や相違点に気付かせ、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠を見直し、深めさせる。

〔検証方法〕

- ・ 評価の基準を活用した自己評価により、自分の課題と解決に向けた筋道を可視化させる。
- ・ 自分の考えを形成し、他者と考えを伝え合うことにより自分の考えを深めるための手順を示した「ワークシート」を作成し、生徒の自己評価と同じ基準で評価するとともに記述内容を基に生徒の特性や学習状況等を分析する。
- ・ 検証授業の事前・事後で自分の考えの変容について、一人1台端末を用いてアンケートを実施する。

VI 研究の内容

1 実践事例 1

教科名	国語	科目名	現代の国語	年次	第1年次
-----	----	-----	-------	----	------

(1) 単元の目標

- ア 主張と論拠など情報と情報の関係について理解すること。 (知識及び技能) (2)ア
 イ 目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関連付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めること。 (思考力、判断力、表現力等) C(1)イ
 ウ 言葉を通して言葉のもつ価値を認識しようとしたり他者や社会に関わろうとしたりして
 いる。 (学びに向かう力、人間性等)

(2) 単元(教材)名

単元名：社会と人間

教材名：「『弱いロボット』の誕生」 岡田美智男 (教科書掲載教材)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。((2)ア)	「読むこと」において、目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関連付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めている。(C(1)イ)	論理的な文章を読み、主張と論拠との関係について理解し、内容や構成を的確に捉えつつ、自分の意見や考えを分かりやすく論述する取組を粘り強く行う中で、自己の学習を調整しようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画(6時間扱い)

時	○ 学習内容 ・ 学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法)
		ア	イ	ウ	
第1時	- 全文を通読し、七段落に分かれていることを確認する。 - 第一段落の読解を行う。 (1)「ロボットのしぐさ」とそれを見た学生の反応について読み取る。	●	●		ア(行動の分析 《音読》) イ(記述の分析 《「ワークシート」》)
第2時	- 第二段落の読解を行う。 (1)「ゴミ箱ロボット」の特徴について読み取る。 (2)「チープ」なものの意味を把握する。 - 第三段落の読解を行う。 (1)わたしたちの手助けを思わず引き出してしまうような場についての筆者の考えを読み取る。		●		イ(記述の分析 《「ワークシート」》)

第3時	・ 第四、第五段落の読解を行う。 (1)「ゴミ箱ロボット」に対する子供たちの反応を読み取る。 (2)「ゴミ箱ロボット」のしぐさと、それに対する子供たちの反応を読み取る。		●		イ（記述の分析《「ワークシート」》）
第4時	・ 第六、第七段落の読解を行う。 (1)「関係論的な行為方略」とは何かを把握する。 (2)「弱さ」を隠さないとはどういうことを理解する。		●		イ（記述の分析《「ワークシート」》）
（本時） 第5時	・ 筆者の評価に対する自分の考えを文章にまとめる。 ・ 「もし相手から弱さを表示されたら、自分ならどのようにするか」という問いに対する答えを考える。 ・ 問いの答えを踏まえ、自分の考えを見直し、深める。		●	●	イ、ウ（記述の分析《「ワークシート」》）
第6時	・ 他者との意見交換を行い、前時で深めた自らの意見を更に深める。		●	●	イ、ウ（記述の分析《「ワークシート」》）

(5) 本時（全6時間中の第5時間目）

ア 本時の目標

設定された「問い」について考えることによって、本文に対する自分の考えを形成する。

イ 仮説に基づく本時のねらい

生徒の思考を促す問いを設定することで、自分の既存の知識や様々な経験と結び付き、筆者の主張や物語に対する生徒の理解が深まるとともに、自分の言葉で考えを形成できると考え、ねらいを設定した。

ウ 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準(評価方法)
導入	・ 本時の活動内容を把握する。 ・ 前時で配られたワークシートを振り返り、本文に対する自らの意見を確認する。 ・ 評価の基準を確認し、自分の到達度を図る。	・ 本時の内容が、前時の最後にまとめた、本文に対する自らの意見をより深める内容であると伝える。 ・ 前時で取組んだ、「筆者の意見」と「本文に対する自らの意見」の項目を確認するように伝える。 ・ 現在の自分の到達度には、青で丸を付けるように指示する。	
展開	・ ワーク①を行う。 - 前時でまとめた、本文に対する自らの意見について振り返る。	・ 前時の内容をワークシートに簡潔に書き写すことを伝える。	イ（記述の分析《「ワークシート」》）

	- ワーク②を行う。 「あなたが他者から弱さを開示されたら、どのように行動しますか？」という問いに対する答えを考える。 - ワーク③を行う。 ワーク②の答えを踏まえて、ワーク①で考えた自らの意見を考え直す。	- スクリーンに映し出された問いをワークシートに書き写し、その後問いに対する答えを書くように伝える。 - ワーク②を踏まえて、もう一度自分の考えを振り返り、再度自分の意見をワークシートにまとめるよう伝える。	
まとめ	- 評価の基準を再度確認し、本時の内容を経て、自らの到達度の変容を図る。 - 次時の予告を聞き、学習の見通しを持つ。	- 現在の自分の到達度には、赤で丸を付けるように指示する。 - 次時では、他者と意見を共有し、本時でまとめた意見をさらに深めていくことを伝える。	ウ（記述の分析《「ワークシート」》）

(6) 本時の振り返り

ア 「ワークシート」(図1)について

前時で考えた自らの意見を復習してから本題である問いを考える形式にすることで、生徒が自らの意見をすぐに振り返ることができるように工夫した。ワークシートを用いて、自らの意見を随時振り返ることにより、自らの考えを深めるという本単元の目標に合致した学習活動となった。

イ 評価について

授業の導入で評価の基準を提示し、

A	文章の内容と自分の知識や経験を結び付け、自分の考えを形成できている。
B	文章の内容に対する自分の考えを形成できている。
C	自分の考えを形成できていない。

図1 「考えの形成」の評価の基準

現時点での自らの到達度を確認した。さらに、本時で目指すべき目標を共有した。ワーク③の終了時に再度評価の基準を確認することで、本時における自らの到達度を確認した。評価の基準を示すことで、生徒自身が学習を調整しようとする姿勢を測る指標となり、「主体的に学習に取り組む態度」を測る際に活用することができた。「思考・判断・表現」については、ワークシートの記述内容の工夫を評価した。

評価の基準による生徒の自己評価の結果(表1)から、授業後に評価がAに到達した生徒の割合が全体の46%に、導入時より上昇した生徒の割合が50%となることから、評価の基準の活用、及びワークシートの活用による学習の効果を実感している生徒がいることが分かる。一方、下降した生徒や、変化がなかった生徒については、ワークシートから記述の内容を確認した。ワークシートからは、よく取り組んでいる様子が確認できた。事前の評価はその時

点での「考えの形成」に対する理解を基にした自己評価であるが、授業を受ける中で、「考えの形成」について理解が深まり、不足している点を自覚したことが評価の下降や、評価に変化がないことに反映されたと考えられる。

表1 ワークシートにおけるルーブリックによる生徒の自己評価の結果

	A	B	C	評価が 上昇した生徒	評価が 下降した生徒	評価に変化が なかった生徒
検証①事前	15%	57%	28%			
検証①事後	46%	44%	10%	50%	11%	39%

表2 教員による評価

評価の場面	A	B	C
検証①「文章の内容と自分の知識や経験を結び付けさせ、自分の考えを形成できている」	75%	18%	7%
検証②「自分と他者の考えの共通点や相違点に気づき、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠や論拠を見直し、深めることができている」	89%	4%	7%
単元のまとめ「『読むこと』において、目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関連付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めている」	89%	2%	4%

ウ アンケートの結果について

事前・事後アンケート（表3）の肯定的な回答の割合を比較すると、事前、事後①「文章の内容に対して自分の考えを形成すること」については、17ポイント増となった。また、事前、事後②「文章の内容に対して、自分のもっている知識や経験などと関連させて考えを形成すること」については35ポイント増となった。以上の結果から、生徒の思考を促す問いについて考えることが、生徒の考えの形成につながっており、また、生徒自身も考えを形成することができていると実感していることが分かる。

表3 事前・事後アンケートの結果

	項目	できている	まあ できている	あまり できていない	できていない	肯定的な回答 ※()内は事前との比較
事前	①	20%	51%	29%	0%	71 p
	②	12%	36%	52%	0%	48 p
事後	①	45%	43%	12%	0%	88 p (+17 p)
	②	38%	45%	17%	0%	83 p (+35 p)

① 授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や文章の内容に対して、自分の考えをもつ（形成する）ことができていますか。

② 授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や文章の内容に対して、自分のもっている知識や経験などと関連させて考えをもつ（形成する）ことができていますか。

2 実践事例2

教科名	国語	科目名	古典探究	年次	第2年次
-----	----	-----	------	----	------

(1) 単元の目標

ア 先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。 (知識及び技能) (2)エ

イ 古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。

(思考力、判断力、表現力等) A(1)カ

ウ 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養っている。

(学びに向かう力、人間性等)

(2) 単元(教材)名

単元名：日記1

教材名：『更級日記』より「物語」(教科書掲載教材)

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにしている。((2)エ)	「読むこと」において、古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりできている。(A(1)カ)	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、言葉を通して他者や社会に関わろうとする中で、自己の学習を調整しようとしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画(5時間扱い)

時	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法)
		ア	イ	ウ	
第1時	・本章段までの流れや文学史上の位置付けを確認する。 ・本文を読解し、作者にとって『源氏物語』がどのような存在であったか理解する。	●			ア(定期考査)
第2時	・『源氏物語』を読んだ作者がどのような気持ちになったか理解する。	●			ア(定期考査)
第3時	・作者が見た夢の内容から、作者の心理を考察する。 ・自分の将来を想像した姿として、「夕顔」、「浮舟」を選んだ理由を考察する。	●			ア(定期考査)
第4時	・作品の内容を踏まえ、自分の考えを形成し、文章にまとめる。		●	●	イウ(記述の分析 《「ワークシート」》)

第5時 (本時)	・他者との意見交換を行い、前時で深めた自分の意見を更に深める。		●	●	イウ（記述の分析 《「ワークシート」》）
-------------	---------------------------------	--	---	---	-------------------------

(5) 本時（全5時間中の第5時間目）

ア 本時の目標

他者との意見交換を踏まえて自分の考えを形成することによって、自分の考えを広げ、深める。

イ 仮説に基づく本時のねらい

文章から読み取ったことに対する自分の考えを記入し、それぞれの考えを伝え合うことで、多面的・多角的な視点から文章を捉え、自分の考えを更に広げたり深めたりできると考え、ねらいを設定した。

ウ 本時で使用するワークシート（図2、3）

図3 「考えの形成」の評価の基準

図2

エ 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準(評価方法)
導入	・本時の目標を把握する。 ・評価の基準を確認し、自分の到達度を把握する。	・本時の活動が、他者との意見交換を行うことで、自分の考えをより深めることを目指すものであると伝える。 ・他者の意見を理解したうえで、自分の意見が必ずしも変わるとは限らない。その場合も、なぜ意見が変わらなかったのかを示せるようにすることが大切だということを伝える。	
展開	・ワーク1を振り返る。 ・ワーク2を行う。 他者との考えの交換を行い、考えとその根拠をワークシートにまとめる。	・前時にまとめた自分の意見を振り返らせる。 ・メモを取りながら聞くことになるため、発表する人はゆっくり話すように伝える。	イ、ウ（記述の分析《「ワークシート」》）

	- ワーク 3、4 を行う。 - ワーク 2 の内容を踏まえ、自分の考えを再構築する。	意見が変わった場合は変わった根拠を示し、変わらなかった場合はなぜ変わらなかったのかを明確にするように指示する。	
まとめ	- 自己評価を行う。 - 自分の考えをもつことは、古典の読解に深みをもたせるということを理解する。	- 自分の到達度に丸を付けるように指示する。 - 自分の考えをもつことは、口語訳をするだけではできない内容の理解につながるということに気付かせる。	

(6) 本時の振り返り

ア 言語活動について

ワークシートに記述した内容を基に他者と意見交換し、自分と他者の考えを相対化することで、様々な視点から自分の考えを見直し、自分の考えを深める言語活動を設定した。活動を通して自分の考えが変わったと記述する生徒、変わらなかったと記述する生徒の両方がいたが、なぜ変わったか、変わらなかったかという根拠を明確にして記述できている、考えを深める活動になったと考えられる。

イ 評価について

表 4、表 5 は本時の活動に対する生徒の自己評価と教員による評価の表である。自己評価について、B 評価にしていた生徒のワークシートの記述を見たところ、授業者は「A 評価でいいのではないかと感じた。生徒複数名に話を聞いたところ、「もっといろいろな角度から考えられると思ったから B にした」、「友達の意見や根拠についてもっと深められると思ったから今回は B にした」といったように、「どれだけできているか」について、ばらつきが生じていた。授業中に基準の説明をより丁寧に行うことはもちろんだが、基準について精査していくことや、ワークシートの記述内容をしっかりと見取ることが必要である。

表 4 本時の活動に対する生徒の自己評価

実践	方策（授業）	A	B	C
2	検証②	80%	20%	0%

表 5 教員による評価

評価の場面	A	B	C
検証①「文章の内容と自分の知識や経験を結び付けさせ、自分の考えを形成できている」	93%	7%	0%
検証②「自分と他者の考えの共通点や相違点に気づき、多面的・多角的な視点から自分の考えの根拠や論拠を見直し、深めることができている」	100%	0%	0%
単元のまとめ「『読むこと』において、目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関連付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めている。」	100%	0%	0%

ウ アンケートの結果について

検証授業の事前、事後にアンケートを行うことで、生徒の変容を見取るようにした(表6)。

①、②の二つの項目については、事前アンケートで「あまりできていない」「まあできている」という生徒が多かったが、授業を通してほぼ全員が肯定的な回答をするようになった。③については想定よりも事前アンケートで肯定的な回答をする生徒が多かったが、授業後には「できている」と回答をした生徒が八割近くに到達したことから、授業を通して自分の考えと他者の考え方を相対化することにより自分の考えを深めることにつながったと考えられる。

表6 事前・事後のアンケートの結果

	項目	できている	まあできている	あまりできていない	できていない	肯定的な回答
事前	①	10%	48%	34%	8%	
	②	7%	45%	48%	0%	
	③	41%	34%	25%	0%	
事後	①	52%	48%	0%	0%	+42 p
	②	45%	48%	4%	3%	+41 p
	③	79%	21%	0%	0%	+25 p

- ① 授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や物語の内容に対して、自分の考えをもち、表現することができますか。
- ② 授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や物語の内容に対して、自分のもっている知識や経験などに関連させて、自分の考えを表現することができますか。
- ③ 他者との意見交換をした際に、自分の考えを深めることができますか。

Ⅶ 研究の成果

1 仮説「単年で育成することを目指す資質・能力と、資質・能力を身に付けるための筋道を可視化することで、生徒が自分の学習を調整し、よりよく資質・能力を身に付けることができる。」の検証

(1) 評価の基準を示すことによる効果

本研究では、授業の導入でルーブリックを提示し、現時点での自らの到達度を確認させるとともに、本時で目指すべき目標を共有した。また、授業のまとめでは、再度ルーブリックを確認することで、本時における自らの到達度を確認した。実践事例では、多くの生徒の自己評価が上昇していたことから、評価の基準を活用することで目標が明確化し、自らの取組を調整し、生徒がよりよく資質・能力を身に付けることにつながったと考えられる。一方、変化がなかった生徒、下降した生徒についてワークシートの記述を分析したところ、よく取り組んでいる様子も見受けられた。ルーブリックの記載内容や表現を工夫するとともに、一層適切な自己評価ができる指導の在り方について検討していく必要がある。

(2) ワークシートの活用

実践事例では、ワークシートを用いて学習を進めることで、見通しをもって学習することをねらいとした。また、他者と協働した言語活動の際に、自分の考えと他者の考えを記載し、

自分の考えの変化について記載できるようにした。ワークシートの記載からは、他者の意見を踏まえた自己の考えの変化や深まりが見え、新たな視点を獲得することで、生徒が自らの課題を相対化し、学習の調整に役立てることができたと考えられる。

(3) 仮説 1 に対する検証のまとめ

(1) (2) で述べたように、授業でルーブリックとワークシートを用いて「自分の課題と解決に向けた筋道を可視化すること」で、現時点での自らの到達度が確認でき、目標達成に向けた学習の調整につなげることができたとと言える。

2 仮説 2 「教師が生徒に対して思考を促す問いを設定し、多様な論点や異なる価値観と結び付けの言語活動を行うことで、生徒が自分の考えを形成することができる。」の検証

次の表は実践事例 1・2 の事前・事後アンケートの結果である。各項目について検証を行う。

表 9

実践	項目	できている		まあできている		あまりできていない		できていない		増減
		事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	
1	①	20%	45%	51%	43%	29%	12%	0%	0%	+12 p
	②	12%	45%	36%	43%	52%	12%	0%	0%	+40 p
	③	46%	60%	43%	32%	11%	8%	0%	0%	+3 p
2	①	10%	52%	48%	48%	34%	0%	8%	0%	+42 p
	②	7%	45%	45%	48%	48%	4%	0%	3%	+41 p
	③	41%	79%	34%	21%	25%	0%	0%	0%	+25 p

項目① 授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や物語の内容に対して、自分の考えをもち、表現することができますか。

項目② 授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や物語の内容に対して、自分のもっている知識や経験などと関連させて、自分の考えを表現することができますか。

項目③ 他者との意見交換をした際に、自分の考えを深めることができたと感じたことはありますか。

(1) アンケート結果の分析

ア 「①授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や物語の内容に対して、自分の考えをもち、表現することができますか。」に対する事前アンケートの回答の検証

本研究では、『読むこと』において、文章の構造と内容の把握にとどまり、言葉を通して自分の考えを形成することが十分にできていない。」という課題意識をもっており、その検証としてアンケートを行った。「できている」と回答した生徒の割合は実践事例 1 が 20%、実践事例 2 が 10%と低い割合であり、否定的な回答をした生徒の割合は実践事例 1 が 29%、実践事例 2 が 42%と高い割合であったことから、生徒の多くは自分の考えを十分に形成できていないということが分かった。

イ 「②授業で文章を読んだ際に、筆者の意見や物語の内容に対して、自分の持っている知識や経験などと関連させて、自分の考えを表現することができますか。」に対する事前アンケートの回答の検証

「できている」と回答した生徒の割合は実践事例1で12%、実践事例2で7%と、実践事例1・2ともに項目①よりも肯定的な回答が少なく、否定的な回答が多かったことから、自分の考えを形成できていると回答した生徒も、自分のもっている知識や経験と関連させることができていないということが分かる。

ウ 「生徒の思考を促す問い」を設定した授業の実施

授業実施後のアンケートにおける肯定的な回答は、実践事例1が項目①は12ポイント、項目②は40ポイント、実践事例2が項目①は42ポイント、項目②は41ポイントとそれぞれ大幅に増加した。ともに否定的な回答をした生徒が減っていることから、生徒が、筆者の意見や物語の内容に対して自分の考えをもつとともに、自分のもっている知識や経験などに関連させて自分の考えを表現させることができたと感じていることが分かる。言葉を通して自分の考えを形成するためには、学習活動及びそれに適した問いの設定が効果的であると考えられる。

エ 「③他者との意見交換をした際に、自分の考えを深めることができたと感じたことはありますか。」に対する生徒の回答の検証

項目①・②と比較すると事前アンケートで肯定的回答が多かった項目であり、他者との意見交換を行うことで自分の考えを深めることを日常的に行っていることが分かる。実践事例1・2共に、自分の考えをより深めるために「自分と他者の考えを相対化することで多面的・多角的な視点から自分の考えを見直す」、「最終的な自分の考えを書く際に、なぜ変わったか、なぜ変わらなかったのかを明確にする」という明確な目的意識をもった話し合い活動を中心とした授業を行った。実践事例1の事後アンケートの結果は3ポイントの増加であるが、「できている」と回答した生徒の割合は14%増加している。そして、実践事例2では25ポイントの増加かつ、否定的な回答をした生徒の割合が0%になった。このことから、自分の考えと他者の考えを相対化することにより生徒は自分の考えが深まったと感じていることが分かる。

(2) 仮説2に対する検証のまとめ

上述のとおり、「生徒の思考を促す問いを設定し、文章と自分の既存の知識や様々な経験を結び付け、自分と他者の考えを相対化する」ことで、「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直し、筆者の主張や物語に対する生徒の理解が深まるとともに、自分の考えを言葉で十分に形成」することにつながることを推察できる。

VIII 今後の課題

1 「考えの形成」に関する指導の充実

高等学校学習指導要領では、国語科改訂の趣旨及び要点の、学習内容の改善・充実として学習過程の「考えの形成」を重視することが示されている。

また、各領域に位置付けられた「考えの形成」では、相手の反応に応じて工夫することや、多面的・多角的な視点を踏まえることで、自分の考えを広げたり深めたりすることが示されている。このような「考えの形成」の指導を充実させていくことは、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が不足しているという指摘を踏まえ、高等学校国語科における、授業改善に取り組む際に非常に重要な視点であると考ええる。

身に付けさせたい資質・能力に基づき、年間を通じた指導の計画を立て、単元の目標や言語活動を設定していくことが引き続き重要である。

2 一人1台端末の活用

「答申」で述べられているとおり、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるためにはICT機器の活用が不可欠である。本研究では、事前・事後のアンケートを実施する際の限定的な活用であったが、プレゼンテーションソフトの自動翻訳機能を活用することにより多様な学習者に対応することや、生成AIの活用、学習ログを活用したエビデンスベースの指導等、新たな教材や学習活動等を積極的に取り入れ、個別最適な学びや協働的な学びを充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。

3 国語科の果たすべき役割

現代の社会においては、多様な考え方や価値観をもった人々との間で伝え合い、相互理解を深めながら人間関係を形成していく必要性和重要性は高まる一方である。このような背景の中で、基礎的な言語能力を育んでいくことは国語科の使命である。

高等学校学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの推進では、育成を目指す資質・能力を教科横断的な視点から組み立てていくことが求められている。学習の基盤となる言語能力の育成に向けた、中核的な役割を担う我々国語科の授業者は、絶えず研修と実践に取り組むことを通して、その使命と責務を果たしていく必要がある。

令和6年度 教育研究員名簿

高等学校・国語

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立江北高等学校	主任教諭	◎宮 原 耕
東京都立墨田川高等学校	主任教諭	高 橋 歩
東京都立大江戸高等学校	主任教諭	齋 藤 隆 平
東京都立雪谷高等学校	教 諭	矢 野 遼
東京都立保谷高等学校	主任教諭	尾 見 由季子

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課

指導主事 西本 光

令和 6 年度
教育研究員研究報告書
高等学校・国語

令和 7 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320—6849